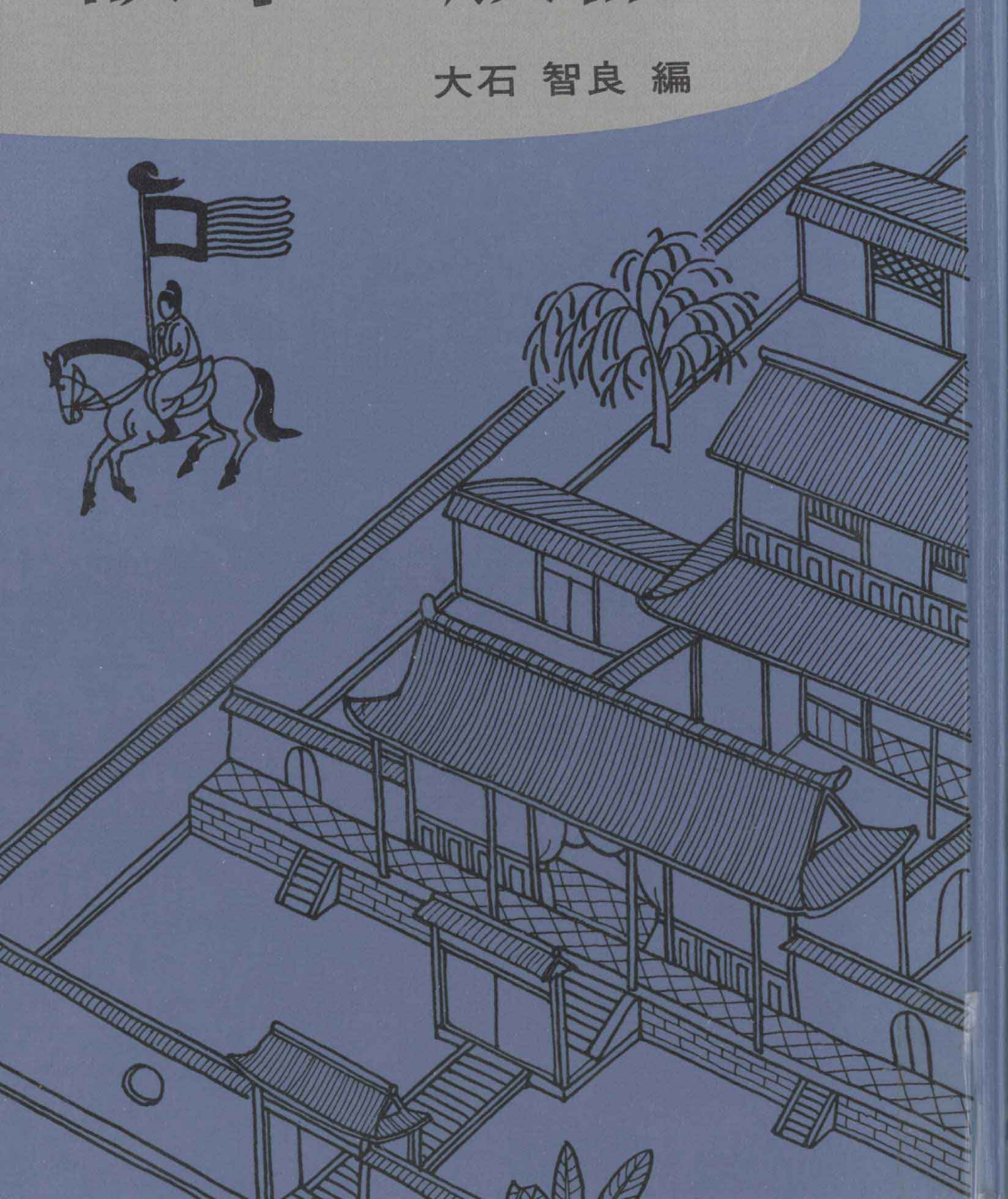
中国の古典文学 14

故事と成語

大石 智良 編



中国の古典文学 14

故事と成語

入谷 智良 編

さ・え・ら 書房

大石 智良（おおいし・ちよし）
1941年，東京生まれ。法政大学講師。
訳書に『中国の民話』『史記』（いずれも共訳）等。

故事と成語〈少年少女のための中国の古典文学14〉

昭和53年 2 月 第1刷発行

定価 1250円

編 者 大石 智良
発行者 浦城 光郷
東京都新宿区市谷砂土原町3—1
発行所 さ・え・ら書房
振替 東京 4—87244
☎ 03-268-4261(代)

製版／杜陵印刷 印刷／坂間印刷・東峯印刷 製本／協栄製本

© 大石智良 1978

8398—6314—2708
NDC 928

はじめに

みなさんは、中国の話から生まれたことわざをどのくらい知っているだろうか。あらためて質問されると、はて？　と首をかしげてしまうかもしれない。たとえば「井の中の蛙、大海を知らず」とか「百聞は一見に如かず」などということばはみなさんもよく使うと思う。これが中国の話から出たことわざだ。

ことわざではなくても、「こんどのテストのできは〝完璧〟だった」とか「その話は〝矛盾〟している」などと、日常会話のなかでよく使う熟語がある。これも中国の話がもとになっている。

日本は、海をはさんで隣り合っている中国から、文化のうえで大きな影響をうけてきた。漢字を知り、中国の書物を読むようになって、わたしたちの祖先は中国の文化の高さに目をみはり、それを熱心に学んだ。そして消化できるものはどんどんとり入れ、自分たちの血と肉にしてきたのだ。はじめにあげたことわざや熟語は、そのもっともわかりやすい例といえるだろう。もとをただせば中国の古い話から生まれたことばで、今日のわたしたちがそうとは意識せずに使っている、そんな例はほかにもたくさんある。

このようなことわざや特別な意味をもった熟語を「成語」といい、それが生まれたもとの話を「故事」という。この本はわたしたちが日ごろ、見たり、聞いたり、話したりする成語を、その故事にまでさかのぼって味わいなおしてみる、そうすることで成語に対する理解をよりいっそう深めよう、というねらいで編んだ。

ここに収めた百三十余の故事と成語は、大部分が紀元前の大むかしにできた。何百年、何千年と生きつづけてきたものばかりだから、なかには、いつのまにか表現が変わったり、意味がずれてしまったものもある。そんなこともふくめて故事を味わい、成語の意味をつかんでほしい。

なお、各篇の最後に出典を示した。この「中国の古典文学」シリーズに収められているものが少なくない。もとの著作にあたれば、理解はいっそう深まるだろう。

（編者・大石智良）

◆執筆者（五十音順）

市川宏　杉本達夫　丹羽隼兵　守屋洋
大石智良　竹内良雄　丸山松幸　山谷弘之
奥平卓　中村愿　村山孚　和田武司
久米旺生

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もくじ

はじめに……1

◈あ　行◈

青は藍より出でて藍より青し……8
羹に懲りて膾を吹く……10
過ちて改めざる、これを過ちという……12
石に立つ矢……14
衣食足りて礼節を知る……16
一衣帯水……18
一網打尽……20
一葉落ちて天下の秋を知る……22
一を聞いて十を知る……24
一将功成って万骨枯る……26
一敗地に塗れる……28
井の中の蛙、大海を知らず……30
鴛鴦の契り……32
燕雀いずくんぞ鴻鵠の志を知らんや……34
己の欲せざるところは、人に施すなかれ……36
尾を塗中に曳く……38
温故知新……40

◈か　行◈

骸骨を請う……42
蝸牛角上の争い……44
和氏の璧……46
臥薪嘗胆……48

苛政は虎よりも猛し……50
風蕭々として易水寒し……52
画竜点睛……54
彼を知り己を知れば百戦して殆うからず……56
雁書……58
干将莫邪……60
顔色なし……62
眼中の釘……64
完璧……66
管鮑の交わり……68
騎虎の勢い……70
疑心、暗鬼を生ず……72
木に縁りて魚を求む……74
杞憂……76
漁夫の利……78
株を守る……80
空城の計……82

◇さ　行◇

管をもって天をうかがう……86
群盲、象をなでる……88
君子は庖厨を遠ざく……90
鶏口となるも、牛後となるなかれ……92
螢雪……94
啓発……96
鶏鳴狗盗……98
逆鱗……100
乾坤一擲……102
巻土重来……104
巧言令色、鮮し仁……106
古稀……108
虎穴に入らずんば虎子を得ず……110
五十歩百歩……112
鼓腹撃壌……114

もくじ

先んずれば人を制す……118
三人言いて虎を成す……120
士は己を知る者のために死す……122
四面楚歌……124
春眠、暁を覚えず……126
食指が動く……128
助長……130
而立、不惑、耳順……132
辰歯輔車……134
推敲……136
過ぎたるはなお及ばざるがごとし……138
掣肘……140
千丈の堤も蟻の穴をもって潰ゆ……142
千里眼……144
宋襄の仁……146
漱石枕流……148
惻隠の心……150
その蒔うるや子のごとく、その置くや棄つるがごとくす……152

◆た　行◆

太公望……154
多岐亡羊……156
蛇足……158
断機の教え……160
知音……162
竹馬の友……164
地は国の本なり……166
朝三暮四……168
庭訓……170
轍鮒の急……172
天知る、地知る、子知る、我知る……174
天高く馬肥ゆ……176
桃源郷……178
螳螂の斧……180

虎の威を借る狐……182
鳥のまさに死せんとするや、その鳴くこと哀し……184

◇な　行◇

鳴かず飛ばず……186
何の面目ありてかこれに見えん……188
嚢中の錐……190

❖は　行❖

背水の陣……192
杯中の蛇影……194
馬鹿……196
破鏡重円……198
破竹の勢い……200
匹夫も志を奪うべからず……202
百年河清を俟つ……204
百聞は一見に如かず……206
百里を行く者は九十を半ばとす……208
百発百中……210
貧者の一灯……212
覆水盆に返らず……214
刎頸の交わり……216
法三章……218
褒姒、大いに笑う……220
墨守……222

◆ま　行◆

まず隗より始めよ……224
また呉下の阿蒙にあらず……226
学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆うし……228
水清ければ魚棲まず……230
耳を掩って鐘を盗む……232
矛盾……234
無用の用……236

もくじ

面皮を剝ぐ……238

や　行

病膏肓に入る……240
羊頭狗肉……242
要領を得ず……244
余桃の罪……246
世に伯楽有り、然る後に千里の馬有り……248

ら　行

洛陽の紙価を高める……250

李下に冠を正さず……252
竜頭蛇尾……254
燎原の火……256
良薬は口に苦し……258
墨断……260

わ　行

わが舌を視よ……262
わらびを採る……264

さくいん……266

◈青は藍より出でて藍より青し

「青の染料は藍草からとれるが、藍草より青い。氷は水からできるが、水より冷たい。……」中国古代の思想をまとめあげた書物といわれる『荀子』は、こういうことばで始まる。

原料の藍よりも、それからとれる染料のほうが青いという、平凡な事実をのべて、ひとが成長するうえで、教育がどんなにたいせつか、本人の努力がどんなに必要かのたとえとしているのである。

藍はほうっておいても青の染料にはならない。職人が手を加え、むずかしい製造の工程があって、はじめて染料になる。同様に、水は同じ状態のままでは氷にならない。温度がさがってはじめて氷になる。これを人間にあてはめれば、製造の工程や気温の低下は、教育であり、自分をかえようという努力にほかならない。

荀子（紀元前二九八?～二三五?年）は、人間の天性、つまり生まれつきの性質は悪いものだと考えていた。天性をそのままにしておくと、どうしても成長してから悪事をかさね、身勝手なまねばかりする。だれもがそうであれば、社会に秩序も規律もなくなり、けっきょく人間の生活はなりたたなくなる。ではどうするか。本性をためなおすことだ。それには教育だ。環境をととのえ、うまずたゆまず学びつづけることだ。学ぶことによって、深くすぐれた教養を身につけ、理性をそだて、悪い天性をつくりかえるのだ、と荀子は説く。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

荀子はまたこうもいう。

「よもぎは雑草のあいだに生えるとゆがむものだ。だが、麻のあいだに生えると、まっすぐに丈高くのびる。白砂は美しい。だが、どんなに美しい白砂も、どろの中にまじっていると、いつしか黒ずんでゆく」と。

このことばは、日本の「朱に交われば赤くなる」というたとえと同じで、環境が人格をつくるうえで、どんなに大きな役割をはたすかを語っている。が、環境にたよるだけではいけない。人間はよもぎや砂ではなく、理性も行動力もあるのだから、自分で環境をつくれ、ともかれは説く。

荀子は、目標をめざして休みなく努力することのたいせつさを、説いてやまない。ひとの能力には差がある。が、能力がおとっていることは、成果もおとることにはならない。「駄馬でも十日あるけば、名馬の一日行程になる」とかれはいう。荀子ほど「学べ、努力せよ」と力説した人もめずらしい。

「青は藍より出でて……」というたとえから、さらに「出藍の誉れ」ということばができた。これは、弟子が先生よりもすぐれた成果をあげることを、ほめる意味で使う。

名人上手とよばれる人にも、それぞれ師匠がいる。名選手にもコーチがいる。科学者も文学者も教育を受けて育つ。それぞれがすばらしい仕事をし、師をのりこえる成果をあげたとき、いっぱんに、「出藍の誉れ」だといってたたえるのである。

（『荀子』）

◈羹に懲りて膾を吹く

羹とはあついスープ。膾とは肉をこまかくきざんであえた料理で、もともと冷たいもの。ことばの意味は、あついスープを飲んでやけどをした人が、失敗にこりて、冷たいなますを食べるときにも、フーフー吹いてから食べること。失敗にこりたあまり、用心深くなりすぎることのたとえに使う。

このことばは、『楚辞』という古代の詩集の「惜誦」篇に出てくる。戦国時代の楚の詩人屈原（紀元前三四三～二七七年）の作と伝えられる詩である。

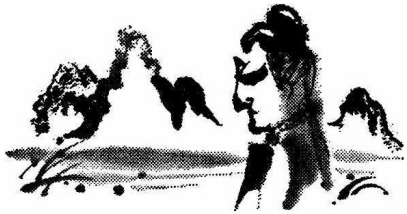
屈原は楚の王族の家がらに生まれた。当時、楚は北方の大国秦に圧迫され、国の前途は容易ならぬものがあった。屈原は秦のはかりごととたたかい、主君を守り、国の危機をすくうために、わが身をわすれて奮闘した。だが、忠誠の士はとかくねたまれ、うとまれる。凡庸な君主にとっては目ざわりであり、腹黒い臣下にとっては敵になる。ひたすらに国を思い、主君を思う屈原の言動は、かえってみんなに憎まれた。屈原はぬれぎぬを着せられ、朝廷から追放されてしまった。

だが屈原は、自分のこころざしを変えようとはしない。自分の忠誠は神かけていつわりではない。にもかかわらず、主君はわかってくれなかった。その不明は嘆かわしいし、いわれなく追い出された身の不運もくやしい。とはいえ自分は、そのために節をまげはしない。どこまでも信ずると

ころを貫くのだ……。

そんな気持ちをうたったのが「惜誦」である。

あつものにこりてなますを吹くというのに　わたしはなぜ
失敗にこりず　こころざしを変えようとせぬのか
はしごをすてて天に登ろうとするかのように　不可能と知りつつなお
はじめの態度をとりつづけるのか
人びとは驚きあきれて離れるばかり
だれがなかまになってくれよう
目的が同じだとて　行く道がかくもちがえば　だれがわたしを援けてくれよう……



追放された屈原は、洞庭湖のほとりをさまよい、やがて汨羅という川に身をなげて死ぬ。そして楚は、秦によって王はとらわれ、領土はうばわれ、滅亡への坂道をころがりつづけたのだった。

（『楚辞』）

◈過ちて改めざる、これを過ちという

『論語』に出ている孔子（紀元前五五一～四七九年）のことばである。

孔子は別のところで、

「だれにせよ、いかにもその人らしい失敗をやるものだね。失敗を観察していれば、その人がらがよくわかるよ。」

ともいっているように、人間に過ちはつきものである。だから、過ちをおかすことより、おかした過ちを改めようとしないのが、ほんとうの過ちなのだ、という。

しかし、過ちを改めるというのは、それほどやさしいことではない。

人間はだれでも自尊心を持っている。自分がまちがいをしでかしたとは考えたくない。かりにまちがいに気がついたとしても、それを他人の前で認めることはまたたいへんつらいものだ。自尊心の傷つくつらさや、他人からの非難に堪える強い意志がなければ、改めることなどできはしないのだ。

だから孔子は、過ちを認めて改めようとする勇気に対しては、きわめて高い評価をあたえていた。かれは君子（社会人の指導者となるにふさわしい人格者）のありかたのひとつとして、

過ちてはすなわち改むるに憚ることなかれ。（過ちをおかしたと気づいたなら、ただちに改

めよ。）

と語っている。

こうした孔子の影響を受けて、弟子たちもこの問題についてはいろいろと名言を残したものだった。たとえば子貢は、

君子の過ちや、日月の食のごとし。過つや人みなこれを見る。更むるや人みなこれを仰ぐ。

（君子のおかす過ちは、日食や月食にたとえられるだろう。過ちをおかすと、すべての人が眼を向ける。だが過ちを改めると、またみんなが仰ぎ見る。）

といい、子夏は、

小人の過つや、かならず文る。（小人、つまり人格のおとる人間は、失敗をやらかすと、なんとかとりつくろうことばかり考える。）

と語った。

失敗したときにこそ、その人間の真価が現れる。よくよく注意すべきことであろう。

（『論語』）

◈石に立つ矢

漢の名将軍李広（紀元前二世紀）のエピソードである。

李広は代々弓術を伝える家がらの出身だった。その血筋をうけただけあって、かれも成長してのち、あっぱれ弓の名人とうたわれるようになった。人にすぐれた体格にめぐまれ、とくに腕が長かったそうだ。

文帝、景帝、武帝と三代の皇帝に仕え、当時、漢の最大の外敵であった匈奴をむこうにまわして、青年時代から数かずの手がらをたてた。匈奴の連中は、李広に「飛将軍」とあだ名をつけておそれ、かれが守備する町には近づかなかったほどだ。

李広の大胆で落ちつきはらった戦いぶりをしめす話がある。

あるとき味方の小部隊が、たった三人の匈奴にこっぴどい目にあわされて逃げ帰ってきた。それをみた李広は、手勢をひきつれてとび出していった。まもなく三人に追いつき、ふたりを殺し、ひとりを生けどりにした。さて引きあげようというとき、ふとみると匈奴の大部隊がせまっている。ところが敵は、李広の軍があまりにも小人数なのでおとりだと思ったらしく、近くの山に陣どってこちらの出方をうかがいはじめた。

いっぽう、李広の軍でも兵卒たちはふるえあがり、いまにも逃げださんばかりであった。李広

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com